

南京木屑（ナンジンムーシエ） 最終回

卒業生訪問と別れ

菊 埼 威

卒業生訪問

卒業した教え子に会うのは楽しいものだ。今までも、卒業生に会いによく上京した。大都会で押しつぶされそうになりながら頑張っている姿は現役学生へのよき参考になった。彼等の悩みを聞いた、また一段と成長した姿に励まされたりした。

六月に、中国での卒業生を初めて送り出して以来、電話やメールのやり取りをしては、彼等の頑張っている様子を見て来た。若者が新しい世界で元氣よくはばたいていたり、逆に戸惑い悩み、はては大きく傷ついたりするのは日本も中国も同じだ。昔と違い社会の仕組みが硬直化し、酷薄な現在においては、その振幅が

大きいようだ。

十一月七日に常州を訪れた。南京から特急で約一時間の旅だ。経済発展の速い江南ヘルト地帯の一角を占め、日系企業も多い都市である。ここも他の都市同様、あちらこちらが掘り返されている。中国では再開発は日常茶飯だ。どこへいっても工事現場があり、大型機械がうなりをあげている。ここ常州は、新しい高層ビルが立ち並んでいる。それもどことなくおしゃれた。近代的な街という印象を得る。

北郊の技術産業開発区にある小松（常州）工程機械有限公司に卒業生の祁雯（チー・ウエン）を訪ねる。彼女は濱江学院日語国際商務の卒業生で、四年生の時に精読を教えた。いつも、澄んだ瞳でまっすぐ僕の方を



卒業生の祁雯（チー・ウエン）

社会に出て、もまれたということだろうか。彼女の案内で事務室をのぞく。実にきれいに整頓されている。ごみも五種類に分別するよう厳しく指示が出ており、トイレもまことに清潔である。日本を感

見つめていた学生で印象深い。彼女はこの日、家族開放日というイベントのために、朝七時半から勤務していない。僕はこの家族開放日に招かれてきた。日本人の総経理の挨拶を聞いたり、工場見学をしたり、ゲームに参加したりして過ごす。

参加者は子ども連れの家族が多い。一緒に行った同僚の楊波（ヤン・ポー）に、この種のことは中国の会社ではあるのかと聞くとないだろうと答えた。日本社会における一種のサービス精神のあらわれだろうか。

頼もしい限りだ。

じた一こまだ。

後日電話で長話をしたが、通訳をやりたいと総経理に直談判したらしい。日本語に関する仕事ならどんなにたらくとも我慢できるとその時は話した。

上海へ

濱江4年生の秦福龍（チン・フーロン）が通訳試験の面接で上海へ行くと聞き、卒業生に会うチャンスとばかりに彼女に同行を申し込んだのだ。

上海駅には、昨年大いに世話になった張賽男（ジャン・サイナン）が出迎えてくれた。彼女の案内で地下鉄に乗り、明日の試験場となる上海応用技術大学の近くへ行く。まずホテルにチェックインする。ここは秦福龍のみで、外国人は泊められないと断られる。やむなく近くを探し、大学西門前の一泊百八十八元の大きなホテルにする。しかしこれは正解だった。秦の泊ったホテルは壁が薄く、隣の音が筒抜けで、彼女は全く眠れなかったそうだ。

大学のそばで桂林米粉を食べ、キャンパスを散策する。ちょうど教師資格試験の最中で、受験生（大学生のみならず、三十代と思われるものも多くいる）が直前

学習に余念がない。

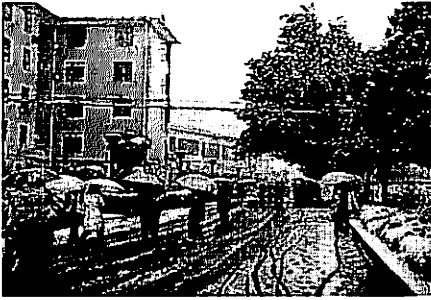
一度行ってみたいと思っていた東方明珠タワーへ行く。地下鉄の駅から表へ出て、タワーを写真に収めようとしたが収まらない。大勢の観光客がエレベーター前で列をなしている。荷物のX線検査だ。ペットボトル類は没収で、空港並みだ。爆弾検査犬もいる。途中の階でさらに並んでエレベーターを乗り換え、最上階に着いたのはかれこれ一時間後だ。おかげで下界はネオンがともり、車のテールランプも赤々と帯をなしている。久しぶりに見る大きな夜景だ。外灘のあたりは工事中らしく人の姿は見られない。五時半ころ降りるが、これも行列だ。

翌日、午前中は秦の試験なので、一人で付近を散策する。まず、ホテル近くの桂林公園、それから上海師範大学構内をぶらりとし、その前の康健園という広大な公園に行く。散歩やジョギングをしている人、太极拳・ダンス・歌・バドミントン・トランプに興じている人、年配者も比較的若い人も思い思いに生活を楽しんでいる。孫を連れた老夫婦もいれば、若いカップルもいる。日本では人々は仕事をしているのか、室内で遊んでいるのか、とにかく外ではあまり見かけないが、

このような風景は中国ではどこに行っても見られる。生活を楽しむという点では中国人はうまいというのがこちらに来て強く感じたことである。

昼に大学の門前で六人の卒業生（張賽男・張云霞・秦如静・殷梦丹・吳娜娜・罗爱丽）と久しぶりに会う。みんな変わらず元気だ。面接の終わった秦福龍を交えて大学近くの飯店に入る。昨日、張賽男が目星をつけておいたらしい。上海料理をこちそうになる。都会の生活はどうだと聞くと、「生活が何かと忙しい。歩くにも何にも人は急いでいて落ち着かない。給料は安いのに、物価は高く大変だ」と言う。張云霞（ジャン・ユンシヤ）は中心部にある貿易会社に勤務しているが、残業代が出ないという。それでも、みんな頑張っている。みんな、それなりに日本語を必要とする職場らしい。とくに云霞はうまくなった。彼女は在学時は班長（級長）だったが、今回もすべてによく気をまわしてくれた。

食後、地下鉄で人民広場へ行き、そこから南京路の歩行者天国をぶらぶらと歩く。外灘には工事中で出ることではできず、そこからタクシーで駅まで行き、みんなと別れる。



初雪のキャンパス

初雪

十一月十五日夜半から雪が降った。夜中の十二時過ぎ、メール着信の音に起こされる。濱江四年の王汝婢（ワン・ウェンチャン）からだ。いったいなんだろうとのぞくと「yuki da!」とある。窓の外を見るとと真つ白な世界が現れていた。何と迷惑な、とは思ったが、思わず感動して、先生にも知らせようと思ったその優しさがうれしい。「真的（ジェンダ）！」と返信する。朝起きてみると五センチメートルくらいは積もつ

ている。自転車は使わず、歩いて濱江へ行く。並木の枝が重そうにグーツと垂れている。風もあり寒い。教室もまことに寒いし、学生の集まりも悪い。道路もそうだったが、校舎もむき出しの廊下などは凍結していて気をつけないとスリッパしてしまう。

何人かの学生が心配してメールを送ってきた。こんなに風もあり、降っている中でも、雪を投げ合ったり、雪だるまを転がしている学生がいる。

夜半には雪はおさまり、翌日は陽がさす。結局十七センチメートルくらい積もったのか。後で学生に聞いたら、膝近くまでのところもあったそうだ。あちらこちらで雪合戦や雪だるま作りに興じている。東北地方や西の緯度の高い地方出身の学生は、「故郷や父母を思い出す」と雪を懐かしみ、南の学生は天からの授かりものとはばかりにたわむれる。

陽はさしたものの気温は上がらないから、いたるところで凍結し、学生が難渋している。その横をすいすい歩く。学生時代の東京の雪を思い出した。並木の枝折れが多い。東門近くのプラタナスが一本、根こそぎ倒れていた。

年末

十二月に入って、寒いことは寒い、太陽もよく顔を出し、比較的穏やかな日が続いた。初旬は四年生の論文添削と試験問題作りに追われ、中旬は学生と食事をする機会が多くあった。龍王山の周りを自転車でく

るりと一周するというちよつとした冒険もした。南大そばのジョン・ラーベ記念館にも寄つてみた。

宿舎の部屋から見える針葉樹はすっかり葉を落とし、初雪の時はまだ青々としていたプラタナスの葉も全くの枯れ葉になった。

第四週は最後の授業があり、またテストも始まった。四年生との別れは、昨年ほどの高揚感がない。昨年は体の不調ゆえのある種の悲壯観が常にあつたから、別れも胸迫るものがあつたが、今年はさほどでないのは、二度目という慣れや、また多くが大学院志望だから、また会えるという気楽さのせいかもしれない。彼等にとつて、果たしてどれだけの存在であり得たのか、はなはだ心もとないが、とにかく一年間の付き合いであつた。

昨年同様、日頃考えていることや彼らへの期待を「贈る言葉」としてプリントし、歌を一曲（わかものよ、からだをきたえておけ……）プレゼントした。涙ぐむ学生がいたり、記念写真をせがまれたり、泣かせる手紙をくれたところを見ると、まあまあというところなのだろう。ことばの壁が大きく、うまく交流できない学生もいて、いつも気にはなっているのだが、それは自分自身の問題でもある。もつと彼等とさまざまな問

題を広く深く論じようと思つているのだが……。

三十日、一、二時間目に最後のテストをおこなう。濱江三年の作文だ。天気は良いが、霜が降りていて、やけに寒い。教室は底冷えがし、静かにしていると足先から寒さがしみこんでくる。学生はときおり手をもんだり、息を吹きかけたりしながら問題に取り組んでいる。陽がさしている外の方が暖かいかもしれない（十時現在、気温一度だった）。

ありがたうございますと云つて、答案用紙を提出した学生がいた。ちよつと早いのが、新年おめでとございますと言つた学生もいた。こういう声を聞くと元気になる。

残すはこのテストの採点・成績処理と明日の読書会のみだ。

読書会は「羅生門」「走れメロス」「山椒魚」「高瀬舟」「なめとこ山の熊」の五作品を読んできた。参加者も三十人前後で、メンバーもほぼ固定した。二学期は四年生がいなくなり、少しさびしくなるが、新しいメンバーを心待ちにしよう。

二月十四日に南京に戻つた。ちようど中国の春節で大学内は空寂無人の世界だった。一週間後にようやく

ちらほら学生の姿を見受けるようになり、二十五日から、二学期が始まった。新しい出会いの始まりだ。最初の授業は、雪国の様子を写真で紹介した。雪深い世界を知らない学生が多いので、歓声をあげてみていた。そして文部省唱歌「ふるさと」を合唱し、まことにいい雰囲気ですタートした。

四月に七人の教え子が新潟経営大学に留学する。彼らがそこで何を見、何を学んでくるのか楽しみでもある。国は違っても若者の成長を見守れることは大きな喜びだ。結婚式の参加をあてにもされている。わずかな期間の付き合いでしかないが、濃密な時間を体験している。もう少し、この国で自分を生かしてみたいと思っている。

六回にわたる駄文の連載をお読みいただきありがとうございます。
うごいました。

（きくさき たけし・中国南京市滞在）

追記 わが大学では、日本語教師を求めております。環境の許される方がおられれば幸いです。お声掛けください。

おとど 大臣の学力、いまむかし

最近、平安時代の藤原道長の日記『御堂関白記』の現代語訳が出版された。およそ千年前の権力者の日記が手軽に覗けるようになった。ところが誤字、脱字や漢文の語法の誤りがやたら多い。辞書や当用漢字などという便利なものがない時代ではあるが。

例えば酒希（酒肴）、参諸（参詣）、陽陰師（陰陽師）、察（察）など枚挙に暇がない。長保二年三月八日の日記には「終日、悩暗給」とある。おそらく「終日、悩み暮らし給う」と書いたつもりだろうが、「暮」と「暗」を書き間違ったと思われる。察するにこの日は随分と暗い気持ちで悩み暮らしたのだろうか。

人様の学力をああた、こうだというのはいい趣味ではないが、権力者となれば甘受せざるを得まい。最近、前総理大臣が字が読めないと批判されたことがあるが、道長はその比ではない。もつとも某前首相と比較されることに道長は、格が違うと嫌がるかも知れない。道長の死後、ほどなくして貴族政治は没落したが、日本の政治もまだまだ変化しそうな気が濃厚である。

（大滝）